白鷗大学教育学部論集
2017, 11(2), 377−398

原著論文

他年代との交流が与える青年の人格発達への影響

― 学生・卒業生合同ワークショップの効果 ―

伊　東　孝　郎[1]

1　目的

青年は同世代とのピア・グループを形成し、互いの姿を確認しながらアイデンティティを確立していく。同時に彼らは上の世代をモデルとして将来の展望を得ていきながら、自らのキャリアをデザインし、人格の発達を遂げていく。身近な年長者というと、大学の先輩やアルバイト先での先輩などが対象となることが多いが、誰もがよいモデルと出会えるわけではない。そこで大学教育の中で、計画的にやや上の世代と出会えるような制度が取り入れられている。

たとえば尊鉢・吉田（2013）は新入生の大学生活適応を目的とした学生メンター制度の効果を分析して、同制度が教員、学生メンター・経験者、1年生のいずれからも支持され、一定の成果を上げていることを報告している。また村山ら（2001）は臨床心理学教育と学生の対人関係の促進という２点を目的として、大学生29名を対象とし、大学院生13名がファシリテーターとして参加した３日間にわたる構成的エンカウンター・グループにおいて、参加者の期待度と満足度、感想を分析した。学部生の満足度は期待度を大きく上回り、大学院生も自分の中にネガティブ、ポジティブ両方の

[1]白鷗大学教育学部
e-mail：ito@fc.hakuoh.ac.jp

気持ちがあることを的確に把握し表出しつつ、グループの達成度や反省点を冷静に分析していたという。そして、院生と学部生の間に「基本的出会い」があったこと、エンカウンター・グループを通じて信頼感が芽生えたことを、総合的に考察している。

今回、筆者が担当するゼミと、トレーニングを担当しスーパーバイザーとして関わっているピア・サポート相談室（伊東，2016）スタッフの学生・卒業生を対象とした合同ワークショップを開催し、その中でともに語り合う複数のワークを実施した。これは同ゼミおよびピア・サポート相談室スタッフの卒業生を対象にして５年毎に行う同窓会の意味合いを含むものであり、2012年２月に続き２回目の開催となった。なお卒業生は、2007年度卒業生から2015年度卒業生まで９期にわたっている。学生は、将来の自分のモデルともいえる卒業生との出会いによって何を学んだのであろう。一方、上の世代である卒業生も、かつての自分と重なる学生との出会いによって何を学んだのだろうか。ワークショップ終了後、参加者から得た感想の記述を分類整理し、学生にとって、また卒業生にとって、本ワークショップが彼らの人格発達につながる機会としてどのように機能したかを分析することとした。

なお今回実施したワーク（後述）は、臨床家としてのトレーニングの中で交流分析再決断療法のグループワークとして、日本の交流分析の草分け的存在である深澤道子先生より学んだものをベースに、独自のアレンジを加えて開発したものであるが、結果的に構成的エンカウンター・グループのエクササイズと重なるところが大きい。野島（2000）によれば、日本では1970年代半ば頃から、かなり構造化されたエンカウンター・グループが実践されるようになり、國分（1981）が著書の中で「構成的グループ・エンカウンター」という用語を使って以来、多くの人々に知られるようになったという。國分（1981）はエスリン研究所をエンカウンター・グループのメッカだという一方で、日本で行われているエンカウンター・グループは大部分がロジャーズ，C．の理論に基づいているともいう。交流分析再

決断療法の技法的ルーツはパールズ, F .のゲシュタルト療法、すなわちエスリン研究所にある。構成的エンカウンター・グループのねらいは①人間関係を作ること、②人間関係を通して自己発見すること、と國分（2000）はいうが、まさに筆者のワーク群も同様のねらいの下に開発されたものであり、共通点は多いと考える。提供可能なワークの形式は、認知課題、行動課題、感情表現課題、コミュニケーション課題などに分類することができるが、今回のワークは対話を基本としたコミュニケーション課題に関わるものとした。これは、今回のワークショップに、幼児連れであるいは妊婦として、活動に制限のある形で参加している複数の卒業生に配慮したためである。

分析方法として、テキストマイニングを使用した。テキストマイニングは自然言語で書かれたテキスト情報を対象としたマイニング技術であり、自然言語処理技術、分析・マイニング技術、可視化技術といった要素技術を組み合わせた複合的な技法である（渡部, 2001）。藤井（2017）は、2016年10月27日時点でテキストマイニングを検索クリエとしてGoogle Scholarにより検索し、ヒットした3,010件の日本語研究（Text Miningの英語文献は2,390,000 件）の上位100件の論文リストを分析した。トピックとして22のカテゴリを定義したが、「手法・技術」などテキストマイニング自体を研究する41件と論文以外の10件を除く49件の上位カテゴリは「医学・生命科学」10、「経済」６、「教育」「都市開発」「特許」４件などとなっており、多様なトピックのテキストを対象にテキストマイニングの研究が行われているという。今回、教育領域にあたる臨床心理学ワークショップの感想の分析として、同技術を用いることは妥当だと考える。

2　方法

⑴　合同ワークショップの実施

筆者が担当するゼミとピア・サポート相談室スタッフの学生・卒業生の合同ワークショップおよび懇親会を、以下の通り実施した。参加者は59名、

内訳は学生27名（４年10名、３年９名、２年８名）、卒業生32名であった。

日時：2017年２月18日（土）

13：00　受付開始

13：30　〈ワーク１：２分間交互自己紹介〉

14：00　〈各期の活動紹介〉

16：15　〈ワーク２：学生を囲んで〉

17：30　終了

18：30　懇親会

20：30　閉会

場所：ワークショップは白鷗大学本キャンパス352教室。

懇親会は小山グランドホテル。

ワークおよびプログラムの具体的な内容は以下の通り。

〈ワーク１：２分間交互自己紹介〉

学生は卒業生と、卒業生は学生と、約１分間ずつ計２分間、互いに自己紹介を行った。その際、自己を最も効果的にアピールできる方法を考えて自分を紹介すること、そして相手の語ることをしっかりと聴くことに重点を置いて臨むよう指示した。一人の相手と相互に自己紹介を終えたならば礼を言って別れ、直ちに別の相手と同様にして相互に自己紹介を行う。これを20分間連続して続けた。

〈各期の活動紹介〉

一期生から順に、卒業年度毎にゼミ／ピア・サポートの卒業生が壇上に上がり、筆者が準備した学生時代（一部卒業後）の活動の様子を写真スライドで提示したものを見ながら、当時の様子を紹介した。どのような写真が提示されるか本人たちもわからないまま、当時の状況を紹介することとなり、柔軟な対応力が求められた。卒業生に続いて、学生も現在の活動の様子を紹介した。４年生作成によるスライドを用いたゼミとピア・サポート活動紹介の後、３年生、２年生が壇上に上がり、簡単に自己紹介をした。なお２年生は、全員４月より同ゼミに進む者であった。

〈ワーク２：学生を囲んで〉

２年生８名を２名ずつに分けて、その周りを10名程度の参加者が囲み、２年生に対して自由に質問を行ったり、あるいは２年生からの質問に答えたりするというワークを実施した。時間は１回あたり15分間程度とし、様子を見て多少調整した。途中で囲むメンバーを変えて２度実施した。続いて３年生を囲み、同じように２度のワークを行った。１度目は２名の３年生を囲む４グループと１名の３年生を囲む１グループ、２度目は１名の３年生を囲む９グループで実施した。

〈懇親会〉

ワークショップ終了後、小山グランドホテルに移動して懇親会を行った。参加した昼のワークショップ終了後に帰宅した11名（卒業生３名、学生８名）を除き、また懇親会のみ参加した卒業生４名と同伴家族１名、筆者を加えて、計54名が参加した。ここでも、卒業年代を超えた参加者同士のコミュニケーションが積極的に行われ、昼間のワークショップの効果をさらに高める場となっていたように見受けられた。全く予定になかったことであるが、卒業生がこれまで接点のなかった学生を誘って、即興で一緒に余興を実施したことも、コミュニケーションが活発に行われていたことを表すエピソードといえよう。

⑵　分析対象としたテキストと分析方法

合同ワークショップに参加した59名（学生27名、卒業生32名）を対象に、ワークショップの感想を記述してメールで送るよう依頼した。その結果、38名（学生25名、卒業生13名、回答率64.4％）から回答が寄せられた。

分析に使用したテキストマイニングのシステムは、ネット上（http://khc.sourceforge.net）でフリー・ソフトウェアとして公開されているKH Coder Version2.00fである。同ソフトウェアは、分析者の作成したコーディング基準にそって言葉や文書を分類するDictionary-basedアプローチと、多変量解析によって言葉や文書を分類するCorrelationalアプローチとを、互いに

補い合う形で統合したアプローチによる、日本語テキスト型データの分析に適したシステムとして作製されたものである（樋口, 2004）。回答全体について、まずテキストマイニングの準備として、データファイルの作成を行った。回答として不適切な部分―筆者への個人的なお礼の文や、(笑）といった表現―を削除し、表現を全て全角に変換し、用語を統一して―「良い」を「よい」など―、テキスト形式のファイルを作成した。そして省略語ながら近年よく使われている「就活」を強制抽出することとし、前処理を実行した後、分析を実行した。全回答から頻出語の確認、学生―卒業生と関連づけた共起ネットワークの図示、学生／卒業生それぞれの自己組織化マップの作成を行った。

3　結果

⑴　全回答中の頻出語

全回答から抽出された語は773語。うち３回以上出現の208語について、頻出順に表１に記した。「する」「できる」「なる」「思う」など一般によく用いられる語が上位を占めたが、今回の特殊な頻出語としては「ゼミ」49、「先輩」48、「自分」40、「感じる」33、「同窓会」28、「話」26、「参加」25、「聞く」22、「今」「時間」「卒業」19などとなった。

表１：全体の頻出語（３回以上）

抽出語	出現回数	抽出語	出現回数	抽出語	出現回数	抽出語	出現回数
する	165	ぬ	8	就職	5	また	3
できる	68	ん	8	将来	5	もっと	3
なる	56	考える	8	紹介	5	やすい	3
思う	54	持つ	8	働く	5	やはり	3
ゼミ	49	社会	8	勉強	5	よろしい	3
先輩	48	就活	8	きっかけ	4	わかる	3
とても	41	多く	8	しっかり	4	ピア	3
自分	40	あらためて	7	すごい	4	以前	3
伊東	37	さる	7	とる	4	囲む	3
ない	34	よい	7	ほとんど	4	意見	3
感じる	33	過ごす	7	やる	4	会話	3
同窓会	28	皆さん	7	安心	4	学び	3
話	26	今後	7	会	4	活かす	3
参加	25	人	7	感謝	4	関わる	3
ある	24	先日	7	感想	4	関係	3
よい	23	前	7	気	4	顔	3
聞く	22	多い	7	久しぶり	4	経つ	3
方々	20	大変	7	強い	4	現在	3
今	19	聞ける	7	参考	4	個人	3
時間	19	いる	6	自然	4	個性	3
卒業	19	もう少し	6	充実	4	行く	3
機会	18	アドバイス	6	場	4	懇親	3
本当に	18	楽しみ	6	色々	4	最初	3
お話	17	活躍	6	心理	4	残る	3
経験	17	嬉しい	6	進む	4	姿	3
たくさん	16	気持ち	6	人生	4	姿勢	3
楽しい	16	緊張	6	世代	4	思い出	3
いう	15	自身	6	声	4	質問	3
会う	15	出る	6	相手	4	手	3
卒業生	15	生活	6	大学	4	初め	3
これから	14	全員	6	普段	4	場面	3
貴重	14	入る	6	変わる	4	成長	3
先生	14	不安	6	目標	4	生きる	3
話す	14	有意義	6	優しい	4	積極	3
ありがとう	13	いただく	5	来る	4	接する	3
ワークショップ	13	くだ	5	来年度	4	先	3
学生	13	それぞれ	5	力	4	想像	3
がんばる	12	つける	5	話せる	4	続ける	3
楽しむ	12	なかなか	5	4月	3	多方面	3
少し	11	なれる	5	OB	3	代	3
様々	11	カラー	5	OG	3	大切	3
進路	10	ワーク	5	あまり	3	聴く	3
いい	9	印象	5	いい	3	当時	3
ない	9	学ぶ	5	お話し	3	動く	3
活動	9	感覚	5	かける	3	得る	3
後輩	9	帰る	5	くる	3	特に	3
交流	9	現役	5	さらに	3	難しい	3
今回	9	合同	5	ずっと	3	日々	3
仕事	9	最後	5	ぜひ	3	年代	3
集まる	9	思い出す	5	つながり	3	悩む	3
知る	9	次	5	どう	3	濃い	3
		受け入れる	5	まず	3	迷う	3
						目指す	3

「自分」の頻出は、今回のワークショップが、他ならぬ自分を顧みる機会になったゆえであると思われる。「自分」を含む文の主なものを表２に記す。これを見ると、学生と卒業生とで使用傾向が異なっていることがわかる。学生にとっては、卒業生から進路や仕事について話を聞き、相談して、学びを得ると同時に、今なすべきことや将来についていろいろな発見があり、不安を取り除き、自身とそのモチベーションを向上させる機会となったようである。一方卒業生にとっては、後輩の姿を見て、話をして、自分の立場が以前とは異なったものになったことを知り、自らを見つめなおし、今後に向けての決意を新たにする機会となったようである。学生にとって卒業生は将来の自分であり、卒業生にとって学生は過去の自分である。本ワークショップにおける両者の接触を通して多くの化学反応が生じ、人格的発達への契機となったことが確認された。

表２：頻出語「自分」を含む文の例

学生

- 自分が４月から働く職種で活躍されている先輩方に、仕事について伺うことができたことも大変貴重でした。
- 同窓会当日は様々な代の先輩方との交流によって、たくさんの意見やアドバイス等を頂くことができ、それを自分に還元しようとするきっかけになりました。
- 自分だけでは、感じられないこと、気づけないことにも気づくことができたし、進路を決めていく上でとてもよい参考になりました。
- 様々な業界で働く先輩方の体験談を聞くことができて、これから自分が社会人として働いていく上での不安が少し和らぐと同時に、自分が考えている以上の選択肢があるのだと学ぶことができました。
- 自分が卒業したらどうなるかという具体的なビジョンを得ることができたと思います。
- 卒業生のお話しから様々な苦労をされているとおっしゃっていました

が、それは悪いことでなく、むしろ自分の成長に結びついていることが自分の中で大きな発見でした。
- これからも自分から進んで挑戦し、多くの失敗をしっかり反省して卒業生のように力をつけたいと思います。
- 経験豊富な先輩方との会話は多方面への興味や自分の考えの偏りを知るきっかけ、自分の目標へのモチベーションへと繋がり、参加できてよかったです。
- 自分もこのゼミに入って、卒業後堂々とこの場に立って自分の言葉で夢や立場を語れるような人になれるようがんばりたいと思いました。
- （前略）ゼミの活動を再確認して今後の展開が少し見えたり、伊東ゼミの濃いカラー満載な先輩方と交流することで、楽しみながら自分を少し向上したりすることができました。

卒業生
- もう一度自分を見つめなおしてみます。
- 数年前の自分を思い出すようで、こうしてゼミの伝統は受け継がれていくのかもしれないと感じた次第です。
- 後輩と話す中で、自分たちが助言をする側になったことを強く感じました。
- 卒業してからあっという間に６年が経ち、自分自身は何も変わっていないつもりだったのですが、歳や経験を重ね、たくさんの後輩ができ、立場が変わっていることに気づき、もっとしっかりしないといけないなぁと思いました。

「聞く」の使用されている文の主なものを表３に示した。「聞く」には、単に話を聞くだけではなく、受容と共感を示しながらの「聴く」と表現すべきスキルとしての使用も含まれていた。筆者のゼミあるいはピア・サポートの学生ならではの特長といえよう。なお「聴く」も３人が使用していたので、こちらの使用文例も併せて表３に記す。

表３：頻出語「聞く」「聴く」を含む文の例

- 新３年生の一人が、「今は話すのが苦手だけれど、伊東ゼミの先輩方は常に聞く姿勢を持ってくれている感じがする、だから自分も話すのが苦じゃなくなっていく気がするし、聞き上手にもなっていきたい」とある場面で言ってくれていました。
- 先輩方はお話をするにあたっては他者を引き込み、話を聞く時には思っていることを引き出すという、心理の授業で学んだことと独自の経験を生かした技術を用いていました。
- 初めは大先輩と接することにとても緊張していましたが、皆さんがとても温かく、また、話を聞いてくれる時もとても真剣に聞いて頂き、僕自身の（中略）話をしたときもとても親身に聞いて下さりました。
- 現役生（特に４年生）は伊東ゼミで培った相手の話を聴く力、そして受け入れる心の余裕があることにぜひ自信を持っていただきたいですし、社会の荒波に揉まれてもぜひ忘れないでほしいなぁと、そんなことを思いながらワークショップに参加させて頂いておりました。

「今」については、「自分が今何をすべきか具体的に分かった気がします。」「（前略）ゼミの先輩方ともお話をすることで、自分が今から、すぐ先の未来をどのように動いたらよいか予測がつくようになりました。」など、まさにHere & Nowで体験したことそのものや、将来へとつながる気づきについての興味深い記述が寄せられた。

「時間」については、「有意義な」「貴重な」「充実した」の各語と結びついて登場することが多かったが、以下のような使用例もあり、各人にとってさまざまな時間が流れていたことが感じられた。「就活について話を聞いてもらったりして、今後に活かせる時間になりました。」「伊東ゼミの皆さんと交流したことで私にとっては自然と自己分析の時間になりました。」

⑵　学生―卒業生と関連づけた共起ネットワーク

次に、全感想からの頻出語（４回以上）について、学生―卒業生と関連づけた共起ネットワークを図１に示した。

学生・卒業生いずれの感想でも共通して頻出したのは、頻出順に「思う」「ゼミ」「先輩」「自分」「伊東」「感じる」「同窓会」「話」「参加」「方々」「今」「時間」「たくさん」「楽しい」「ありがとう」の15語。いずれも13回以上頻出した語であり、これらは学生・卒業生の別なく用いられていたことがわかる。

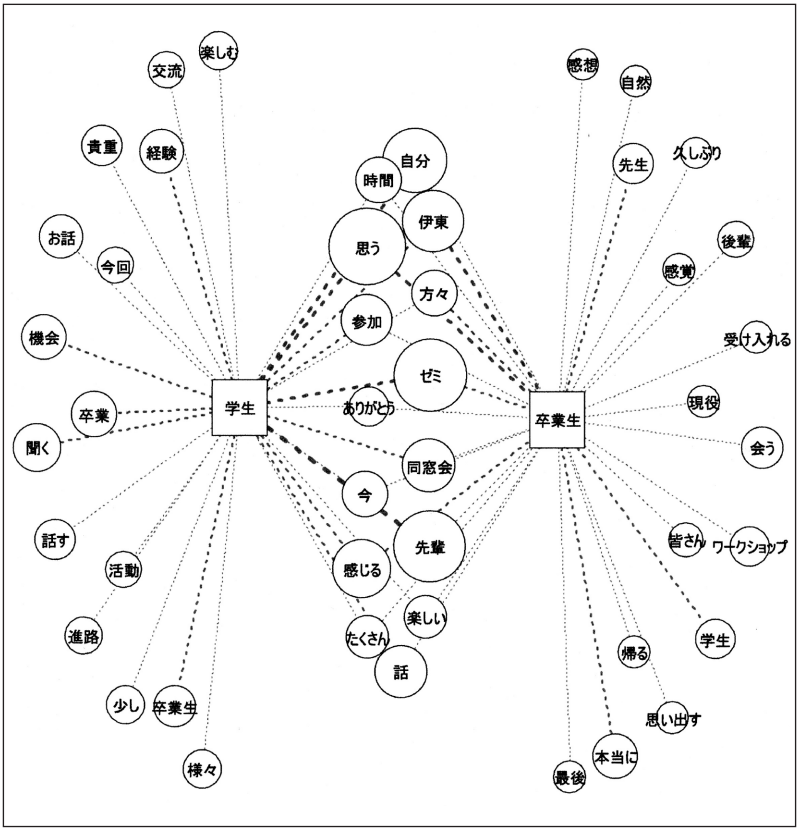


図１：学生―卒業生と関連づけた共起ネットワーク

学生と共起傾向の強かった語は、頻出順に「聞く」「卒業」「機会」「お話」「経験」「卒業生」「貴重」「話す」「楽しむ」「少し」「様々」「進路」「活動」「交流」「今回」。「聞く」は22回用いられた語、「進路」は10回、「活動」「交流」「今回」でも９回と、比較的よく登場した語が並ぶ。学生は「今回」「様々」な「卒業生」と「交流」し「話し」て、「経験」や「活動」、「進路」についての「お話」を「聞き」、「貴重」な「機会」を「楽し」んだ、といえそうである。

一方、卒業生と共起傾向の強かった語は、頻出順に「本当に」「会う」「先生」「ワークショップ」「学生」「後輩」「皆さん」「感覚」「帰る」「現役」「最後」「思い出す」「受け入れる」「感想」「久しぶり」「自然」。「本当に」が最多で18回、「感覚」以降の９語は、５回・４回といったさほど頻出していない語であった。卒業生の回答者は13名と、学生25名に比して少なかったため、結果的にさほど頻出していない語が共起傾向の強い語として挙がったと思われる。卒業生は「ワークショップ」で大学に「帰って」、「久しぶり」に「先生」や「後輩」である「現役」「学生」の「皆さん」と「会い」「受け入れ」られて、「自然」とあの頃の「感覚」を「思い出した」、ということのようだ。

⑶ 学生／卒業生の回答の自己組織化マップ

学生／卒業生それぞれの感想について、自己組織化マップ（集計単位は文、最少出現数３、クラスター数８、学習回数１段階目1000回以上、２段階目AUTO）を作成した。自己組織化マップ（Self-Organizing Maps）とは、人間の脳で行われている情報処理の仕組みをモデルとするニューラルネットワークに取り組んだコホネン, T .による簡略化されたアルゴリズムにより、属性関係の類似なものがよりまとまって仕分けされるものであり、多次元データを２次元にマップ化するときに非常に威力を発揮する（徳高ら，1999）。今回は前述のKH Coder Version2.00fのコマンドを使用した。

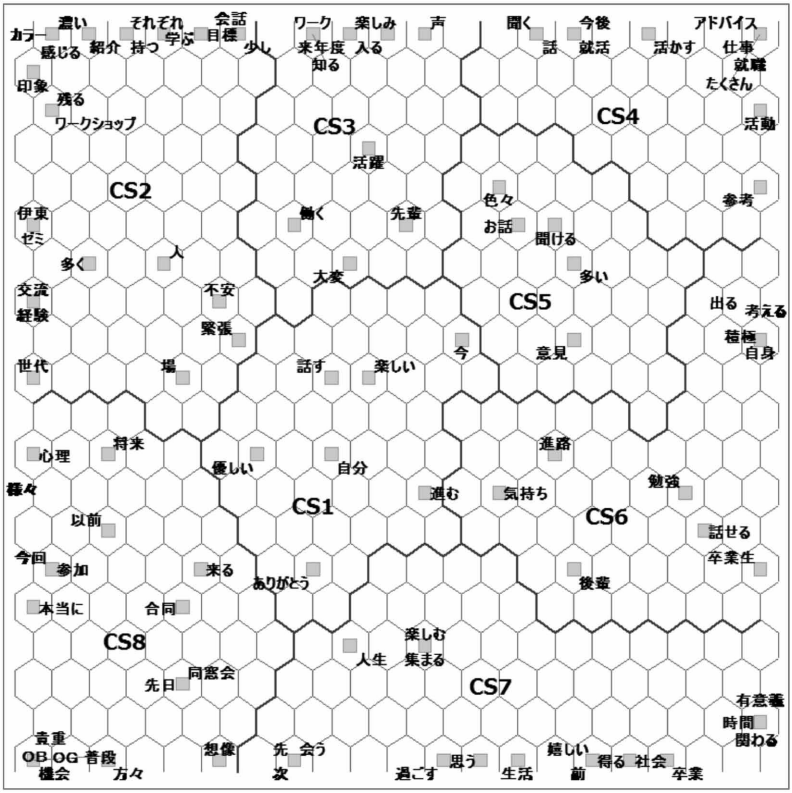


図２：学生の回答の自己組織化マップ

図２に学生の自己組織化マップを示す。中央部分には「自分」「話す」「楽しい」「今」「進む」「優しい」「ありがとう」を含むクラスター（CS1）が位置し、それを取り囲むように各クラスターが布置された。これらの語が実際に使用された文を参照しつつ、あえて一文にするならば、以下のようになろうか。「自分に話してくれて楽しかったし､今から進む先が見えてありがたかった｡」ワークショップ全体の雰囲気が伝わってくるようである。

左上から時計回りに各クラスターをみていく。「伊東」「ゼミ」「多く」「交流」「経験」「世代」「印象」「残る」「ワークショップ」「カラー」「違い」

「感じる」「紹介」「それぞれ」「持つ」「学ぶ」「目標」「会話」「少し」「人」「不安」「緊張」「場」からなるクラスター（CS2）。「ゼミの多くの世代との交流―会話や紹介を通して、不安や緊張はあったものの、それぞれの持つカラーの違いなどを感じ、目標を得た印象に残るワークショップだった。」

「ワーク」「来年度」「知る」「入る」「楽しみ」「声」「活躍」「先輩」「働く」「大変」からなるクラスター（CS3）。自らの将来像である卒業生と、これから後輩になる２年生の両者に対する３年生以上の思いが強く影響しているようだ。「働いている先輩の大変さを知った。ワークを通して来年度ゼミに入る新入生の活躍が楽しみになった。」

「話」「聞く」「今後」「就活」「活かす」「アドバイス」「仕事」「就職」「たくさん」「活動」「参考」からなるクラスター（CS4）。このクラスターのみ、CS1と隣接しておらず、やや距離のあるもののようである。「話を聞いて、今後の就職活動や仕事に活かせるたくさんのアドバイスをもらい、参考になった。」

「色々」「お話」「聞ける」「多い」「意見」からなるクラスター（CS5）。「色々なお話、多くの意見を聞けた。」

「進路」「気持ち」「後輩」「勉強」「卒業生」「話せる」「自身」「積極」「考える」「出る」からなるクラスター（CS6）。「卒業生のように勉強していつか進路について後輩に話せるようになりたい気持ちになり、自身が積極的に出ていくようにしようと考えた。」

「人生」「楽しむ」「集まる」「先」「次」「会う」「過ごす」「思う」「生活」「嬉しい」「前」「得る」「社会」「卒業」「有意義」「時間」「関わる」からなるクラスター（CS7）。卒業を控えた４年生の思いが強く影響しているようだ。「卒業する前に得られた有意義な時間であり、社会に出てから過ごす生活を思うと嬉しくて、次に集まって会える日を楽しみにしている。」

「来る」「合同」「同窓会」「先日」「想像」「方々」「普段」「貴重」「OB・OG」「機会」「本当に」「今回」「参加」「以前」「様々」「心理」「将来」からなるクラスター（CS8）。「先日の合同同窓会は、普段会えないOB・OGの

方々が来てくださって貴重な機会となった。今回参加して、心理職を含む様々な将来について以前より想像できるようになった。」

学生と同様、卒業生の回答の自己組織化マップを図３に示した。学生と同様、「自分」を含むクラスター（CG1）から見ていく。左側中央に位置するこのクラスターは、「自分」「自然」「前」「思い出す」「自身」「帰る」「卒業」からなる。学生と同様、一文にするならば、「前の自分が自然と思い出された。私自身卒業しても帰れる場所。」

学生と同様、時計回りに次のクラスターを見ると、「伊東」「ゼミ」「社

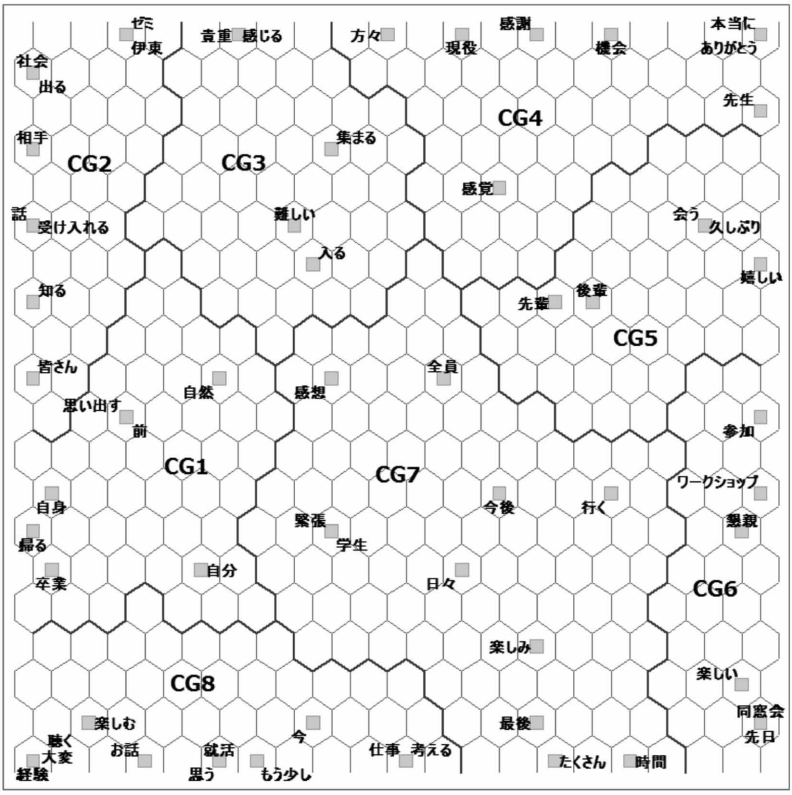


図３：卒業生の回答の自己組織化マップ

会」「出る」「相手」「話」「受け入れる」「知る」「皆さん」からなっている（CG2）。「社会に出て、相手の話を受け入れる伊東ゼミの皆さんのすばらしさを知った。」

「貴重」「感じる」「集まる」「難しい」「入る」からなるクラスター（CG3）。「ゼミに入った皆がこうして集まるのは難しいことだが貴重なことだと感じた。」

「感覚」「方々」「現役」「感謝」「機会」「本当に」「ありがとう」「先生」からなるクラスター（CG4）。謝意が示された記述が影響しているようだ。「現役の方々と接する機会を得て、当時の感覚がよみがえった、先生本当にありがとうございました。」

「先輩」「後輩」「久しぶり」「会う」「嬉しい」からなるクラスター（CG5）。文字通り並べるだけだが、「先輩後輩と久しぶりに会えて嬉しかった。」

「参加」「ワークショップ」「懇親」「楽しい」「同窓会」「先日」からなるクラスター（CG6）。「先日は同窓会・ワークショップ・懇親会に参加して楽しかった。」

「全員」「感想」「緊張」「学生」「今後」「行く」「日々」「楽しみ」「最後」「たくさん」「時間」からなるクラスター（CG7）。「緊張している学生もいたが、たくさん話せて最後までよい時間だった。今後また大学に行きたいし、全員で会うのを楽しみに日々を大切にしたい。」

「仕事」「考える」「今」「もう少し」「就活」「思う」「お話」「楽しむ」「聴く」「大変」「経験」からなるクラスター（CG8）。「お話を聴けて大変いい経験となり楽しめた。もう少し就活についてのお話をできたらよかったと思う。今の仕事や仕事以外のことについて考えさせられた。」

4　考察

全体を通して否定的な記述は全く見られず、肯定的な記述が目立った。指導教員である／であった筆者が感想を求めたということが影響しているという指摘もあろうが、本ゼミもピア・サポート相談室も、個々の学生の

自律性を重視し、それを育成する指導をしているので、これらの記述が筆者への遠慮によって歪められている可能性は少ないと考える。

3回以上出現した頻出208語のうち、今回の特殊な頻出語と考えられるもののリストから、「自分」「聞く」「今」「時間」に注目した。「自分」の記述から、卒業生・学生それぞれが異なる経験をしたことが確認された。学生にとっては、進路や仕事について話を聞き、相談して、学びを得ると同時に、今なすべきことや将来についていろいろな発見があり、不安を取り除き、自身とそのモチベーションを向上させる機会となった。卒業生にとっては、後輩の姿を見て、話をして、自らを見つめなおし、今後に向けた決意を新たにする機会となった。いずれも将来のあるいは過去の自分を見て、対話して、思いを新たに前に進む決意をしたようである。「今」の記述が、Here & Nowで体験したことそのものであると同時に、将来へとつながるものであったこともそれを裏づけている。「聞く」「聴く」については、本ゼミでもピア・サポート相談室でも、ロジャーズ, C .(1957) が挙げた効果的なセラピストの三条件すなわち「自己一致」「無条件の肯定的配慮」「共感的理解」を伝える重要な技法として、在学中のワークショップやトレーニングで指導してきたことである。卒業生はもちろん、在学生にもこれは浸透しており、記述の中でその効果を確認していたようである。彼らにとって、将来あるいは過去の自分との出会いとなったこの「時間」は、有意義で貴重な充実した特別な時間となった。

両者の体験の差異は、共起ネットワークからもうかがえる。以下、学生とのみ共起傾向が強かった語をつないだ文と、卒業生とのみ共起傾向が強かった語をつないだ文を再度記して比較する。

学生：今回様々な卒業生と交流し話して、経験や活動、進路についてのお話を聞き、貴重な機会を楽しんだ。

卒業生：ワークショップで大学に帰って、久しぶりに先生や後輩である現役学生の皆さんと会い受け入れられて、自然とあの頃の感覚を思い出した。

学生にとって卒業生は、自分より先を行く者である。現在迷っている進路などについて、その経験や活動を聞くことで、自分の将来像を得られる貴重な機会となったのではないか。まさに未来からのメッセージだったのであろう。一方卒業生にとって学生は、過去の自分そのものである。いろいろな悩みを持っている一方で多くの夢や希望を抱く彼（女）らを見て、教員も含めた皆に受け入れられることで、学生時代の感覚―初心―を思い出すと同時に、今の自分とこれまでの道のりが肯定されたように感じたのではないだろうか。こちらは過去からのメッセージといったところか。

自己組織化マップによって、学生・卒業生それぞれについて８クラスターの布置を得た。それぞれのクラスターについて表４に文の形式で記した。

表４：学生・卒業生それぞれの８クラスター

学生
CS1　自分に話してくれて楽しかったし、今から進む先が見えてありがたかった。
CS2　ゼミの多くの世代との交流―会話や紹介を通して、不安や緊張はあったものの、それぞれの持つカラーの違いなどを感じ、目標を得た印象に残るワークショップだった。
CS3　働いている先輩の大変さを知った。ワークを通して来年度ゼミに入る新入生の活躍が楽しみになった。
CS4　話を聞いて、今後の就職活動や仕事に活かせるたくさんのアドバイスをもらい、参考になった。
CS5　色々なお話、多くの意見を聞けた。
CS6　卒業生のように勉強していつか進路について後輩に話せるようになりたい気持ちになり、自身が積極的に出るようにしようと考えた。
CS7　卒業する前に得られた有意義な時間であり、社会に出てから過ごす生活を思うと嬉しくて、次に集まって会える日を楽しみにして

いる。

CS8　先日の合同同窓会は、普段会えないOB・OGの方々が来てくださって貴重な機会となった。今回参加して、心理職を含む様々な将来について以前より想像できるようになった。

卒業生

CG1　前の自分が自然と思い出された。私自身卒業しても帰れる場所。

CG2　社会に出て、相手の話を受け入れる伊東ゼミの皆さんのすばらしさを知った。

CG3　ゼミに入った皆がこうして集まるのは難しいことだが貴重なことだと感じた。

CG4　現役の方々と接する機会を得て、当時の感覚がよみがえった、先生本当にありがとう。

CG5　先輩後輩と久しぶりに会えて嬉しかった。

CG6　先日は同窓会・ワークショップ・懇親会に参加して楽しかった。

CG7　緊張している学生もいたが、たくさん話せて最後までよい時間だった。今後また大学に行きたいし、全員で会うのを楽しみに日々を大切にしたい。

CG8　お話を聴けて大変いい経験となり楽しめた。もう少し就活についてのお話をできたらよかったと思う。今の仕事や仕事以外のことについて考えさせられた。

多くのクラスターで、先に述べた学生と卒業生それぞれの特徴が出ているように思われる。学生では８つのクラスター全てにおいて、先輩をモデルとして学んだり決意したりしたことが伺われる記述となっていた。

「今から進む道が見えてありがたかった」

「それぞれの持つカラーの違いなどを感じ、目標を得た」

「働いている先輩の大変さを知った」

「今後の就職活動や仕事に活かせるたくさんのアドバイスをもらい、参考

になった」

「色々なお話、多くの意見を聞けた」

「いつか進路について後輩に話せるようになりたい気持ちになり、自身が積極的に出るようにしようと考えた」

「卒業し社会に出てから過ごす生活を思うと嬉しくて」

「心理職を含む様々な将来について以前より想像できるようになった」

卒業生の記述からも、かつての自分を思い出し、将来について考える機会となったことが確認された。４つのクラスターからそれが伺えた。

「前の自分が自然と思い出された。私自身卒業しても帰れる場所」

「社会に出て、相手の話を受け入れる伊東ゼミの皆さんのすばらしさを知った」

「現役の方々と接する機会を得て、当時の感覚がよみがえった」

「今の仕事や仕事以外のことについて考えさせられた」

今回、学生・卒業生合同ワークショップに関する感想についてのテキストマイニングによる分析を通して、学生は卒業生の姿に将来のさまざまな自分の可能性を見て、進路を含む将来像を思い描き、未来に向けた一歩を踏み出したこと、卒業生は学生の姿に過去の自分を見て、対話を通してこれまでの自分を振り返り、自らの将来について考え、現状を肯定するにしろ変化を求めるにしろ、さらなる成長に向かったことが確認された。

最後に、学生と卒業生それぞれの人格発達を感じさせる代表的な感想を記して、この小論を終えたい。

学生

「今回参加してみて、進路をどうするか迷っている私にとっていい経験ができたとともに、卒業生の意見や今の状況を聞くことができ、刺激にもなりました。最初は、知らない大人の人ばかりで不安でしたが、何度かワークショップを行い、緊張はしましたが、最初の不安はなくなり、親しみと、もっと知りたいという気持ちが強くなりました。自分だけでは、感じられないこと、気づけないことにも気づくことができたし、進路を決めていく

上でとてもよい参考になりました。しかし、もう少し個人的に話す時間、卒業生と在校生の対話する時間があったらよかったかなと思いました。自分の気になる職に就いていたり、院に進んでいたりする方もいたので、もう少しお話ししたかったなというのは少しありました。しかし、滅多に聞けない機会なので、とてもよい経験になりました。」（２年生）

「同窓会では普段接する機会が少ない卒業生の方々にお会いできただけでなく、去年卒業された方、５年前に卒業された方、10年前に卒業された方など様々な年代の方々にお会いできたことで、これから先の人生を想像する事が出来ました。４月からの社会人生活を始める前に仕事や結婚、私生活について思いを巡らせる機会を得られたことを嬉しく思います。自分が４月から働く職種で活躍されている先輩方に、仕事について伺うことが出来た事も大変貴重でした。私も５年後、後輩たちに胸を張って自分の仕事について話せるよう、頑張っていこうと気持ちを新たに出来ました。」（４年生）

卒業生

「私にとっても充実した時間でした。実は４月から今いる職場を辞め、新しい職場に行くのですが…多方面で活躍されている先輩方や未来に向かって努力されている在校生の皆さんに会えたことは大きな刺激となりました。正直なことを申し上げると、それが今の自分のあり方を問われているようにも感じ、（中略）戻ってから再度考えさせられました。卒業してから数年経った私ですが、今でも帰る場所として大学があることを嬉しく思います。」

「沢山の方たちの経験やお話を聴くことができ、楽しみながらも大変学びの多い１日となりました。また、先輩から自ら主体的に学ぼうとする学生が大勢居て、感心しておりました。そういった姿勢は、今後もずっと色々なところで彼らの中で生きていくのだろうなぁと感じました。私自身もこれから心理に携わっていく中で、一生そういった姿勢を続けていきたいと思います。」

【引用文献】

藤井晃（2017） テキストマイニングに関する調査研究 JAIST（北陸先端科学技術大学院大学）Repository

樋口耕一（2004） テキスト型データの計量的分析 ──２つのアプローチの峻別と統合── 理論と方法，Vol.19（1），101−115

伊東孝郎（2016） 白鷗大学ピア・サポート活動 ──10年間の歩み── 白鷗大学教育学部論集，Vol.10（1），143−161

國分康孝（1981） エンカウンター ──心とこころのふれあい 誠信書房

國分康孝（2000） 育てるカウンセリングとしての構成的グループ・エンカウンター／國分康孝編 続・構成的グループ・エンカウンター 誠信書房，3−13

村山正治・下川昭夫・中田行重・鎌田道彦・田中朋子（2001） 臨床心理学の体験的教育としてのエンカウンター・グループ ──大学生の対印関係の促進効果もふまえて── 東亜大学総合人間・文化学部 総合人間科学，Vol.1（1），81−91

野島一彦（2000） 日本におけるエンカウンター・グループの実践と研究の展開：1970−1999 九州大学心理学研究， 1，11−19

Rogers,C.R.（1957）The Necessary and Sufficient Condition of Therapeutic Personality Change. Journal of Counseling Psychology，Vol.21（2），95−103.

尊鉢隆史・吉田武大（2013） 初年次教育における学生メンター制度の意義と効果 ―関西国際大学の取り組みを事例として― 関西国際大学紀要，Vol.14，85−95

徳高平蔵・岸田悟・藤村喜久郎（1999） 自己組織化マップの応用──多次元情報の２次元可視化 海文堂出版

渡部勇（2001） ビジュアルテキストマイニング 人工知能学会誌，Vol.16（2），226−232

【謝辞】

ワークショップに参加し、回答を寄せてくれた学生・卒業生に感謝いたします。今回の体験が彼(女)らの人格発達に寄与し、よりよい人生へとつながることを強く願います。